



教員特別研究（先進的研究）成果報告書 | 配分研究費：2,116千円（令和2年度～令和4年度）

基礎心理学とウェルビーイングを架橋するメディアデザイン体系の構築

目的・概要

本研究はターゲットとして、リハビリテーション/ハビリテーション/MCI（軽度認知障害）対策、という3点に絞って、先端のメディアデザイン手法によって「役立つ」システムを実現する新たなユニバーサルデザイン教育体系の構築を目指したものである。ワークショップなどで色々なシステムを試作したり、新たな視点である「We-mode認知」を調査すると共に、学会発表の機会に専門家との議論を深めた。

期間

令和2年4月1日～令和5年3月31日

研究担当者

デザイン学部 デザイン学科 教授 長嶋 洋一（研究代表者）

スケジュール

令和2年4月～5年3月
令和4年2月
令和4年8月
令和4年9月
令和5年2月

実験・試作、学会発表参加
MDW2022ワークショップ実施
LIFE2022企画セッション
Ars Electronica招待講演
MDW2023ワークショップ実施

研究成果

リハビリテーション/MCI対策などのテーマでのシステム試作、ワークショップの機会に専門家と学生が交流しての検証などを進めて、多くの学会発表も進めてきた。ちょうどCOVID-19に直撃された3年間となったために、試作を高齢者施設などの現場で実際にテストする機会は失われたが、「me-mode認知」という新しい知見も調査することが出来た。LIFE2022（第21回日本生活支援工学会大会+日本機械学会福祉工学シンポジウム2022+第37回ライフサポート学会大会）では、専門家3人と共に本研究に関するテーマセッションの提案が採択されて準備していたが、直前にオンライン変更され、専門家との議論の機会が失われた。

一方で、アルスエレクトロニカの"Expanded Animation 2022" Symposium (テーマ："Synaesthetic Syntax: Gestures of Resistance")での招待講演を行う機会を得て、本研究の大きなテーマを海外の専門家に紹介し議論する機会を得たのが大きな成果となった。なお、科研費応募については断念した。



今後の研究成果の還元方法

COVID-19の直撃を受けた3年間となったため、高齢者施設などでの実験計画は完全に消滅したが、リモート環境下での学会発表や専門家との交流を継続できたこともあり、「We-mode認知」という新概念の検討や、アルスエレクトロニカでの招待講演などの成果を得ることが出来た。

今後は、一つには令和5年11月の研究成果報告会での成果報告、さらにSUAC最終年度として令和5年12月16～17日にメディアデザインウィーク（MDW2024）のサテライトイベントとして公開レクチャー・ミニライブ・ワークショップ (<https://nagasm.org/1106/MDW2024/>)を開催する予定であり、関連する学内/学外の専門家への研究成果還元を目指していきたい。